
押入れパンダ

西美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

押入れパンダ

【Nコード】

N4887Z

【作者名】

西美

【あらすじ】

新生活に胸躍らせる主人公。新居の押入れを開けると中にパンダがいた。

口の悪い、やりたい放題のパンダとの不思議な共同生活。出ていけという主人公と、平気で居座るパンダの攻防戦。ゲームも漫画も楽しむばかりかネットまで操るパンダ。だけでも食事は正座でフオークです。スイーツ大好き。

俺の名前は谷山勇。

田舎から大学に進学のために上京してきた。

そして新たな生活に胸躍らせて、初めての一人暮らしを満喫中。

…のはずだったのだが…

「おい勇。おかわり」

茶碗を差し出され、俺はうなだれてよそう。

「てか、相変わらず肉ねえの？つかえねえな」

毒づかれつつオカズを平らげられる。

なぜか俺のバイトの金で買った食材にケチつけ

俺が作った夕食に文句いい平らげる

そんなパンダが俺の目の前にいます。

二週間前の、この狭いワンルームの部屋に最初に来た日。

家賃7万円と田舎じゃ4LDKは借りれる金額に驚きつつ

とりあえずボロだけど日当たりの良いソコでの新生活への期待。

簡単に荷物を運びいれ、ある程度片付いた時にはもう夜で

さて、布団でも敷いて寝ようと押入れを開けると

そこにいたのがコイツだった。

うずくまる俺と似た体格と毛むくじゃらに

最初はぬいぐるみが入っていたのかと思ったのだが

生きてるように、なんかモゴモゴ動かし

何より熊かと思って、これは疲労の夢だと自分に言い聞かせ

そして俺は見なかった事にして押入れを閉じたんだ。

引越しの疲労でそのまま床に倒れこみつつ

「あー疲れてるな」

なんて思ってた天井をみているうちに寝てしまい

起きた時には、もう朝だった。

部屋を見回すと何も変化もなく

「あーやっぱり疲れてたなー」

と独り言を言つてトイレに入ると

それはいた。

なんか白と黒のパンダが洋式トイレに座つてただけでなく
こつちを睨んで

「みんなよ」

と怒られた。

つて、なんだ！！おい！！

とパニックになりつつ、俺はまたもや
なかった事にして律儀に

「すいません」

と謝罪してドアを反射的に閉めて固まった。

流石にこれはない。疲労というより病気のレベルだ。

水を流す音が流れ、ソイツは出てきた。

固まつてる俺を無視して台所に向かい

水道で手を洗っている。

背中を見てもフアスナーもなく

着ぐるみではなさそうだが…でも…

しゃべったよな？さつき…。

ぐるぐると眩暈すら覚える俺に

パンダは背中向けたまま話かけてきた。

「お前名前は？」

「え？俺？」

いきなりパンダに名前聞かれた。

てか、やっぱりしゃべってるよな？

「とつとと言えよトロイ奴。名前だよ、なーまーえ」

パンダは口が悪かった。

「勇だけど…谷山勇」

それでやっとパンダは振り返って俺の顔を見て

「ダッセー名前！！プッ！！」

と、生意気に口の端を歪ませて笑いやがった。

これが奴と俺との始まりだった。

ソイツは勝手気ままに俺の新居でやりたい放題。

冷蔵庫から俺の買ってきたデザートプリンを開けて

「はい、プッチン・プッチン」

とCMソングまで歌いながら、口をあぐりあげて一口で呑む。

「こら、それ俺の！！」

「ちっせーぞ勇」

聞いちゃいない。

おっさんみたいに寝そべって優雅にテレビなどつけて

「なんかおもしろいのねーの？」

テレビ番組にまでケチつけた。

俺は半ば啞然としていたのだが

「AV出せよ、持ってるの？」

に我に返り

「あるかボケっ！！」

と怒鳴りつけた。

だがパンダは平気どころか

「大声出すとご近所迷惑だよーん」

と指摘される。

「越してきたばかりで、追い出される勇ちゃん可哀想」

誰のせいだと思ってるのか…と、まてまて。

パンダなど、いたら確実に追い出されるレベルの話ではない。

いきなり現実に戻された俺。

パンダに向かって

「でてけ」

「なんで？」

なんでじゃないだろう。

「なんでいるんだよ！！ここは俺の部屋だぞ」
そう言つてはみたものの

「しらねー」

この糞パンダ。

俺は必死でどうやって、この事態に対処するか考えた。
人の気も知らないで、ゲラゲラと漫画見て笑っている。
てか漫画読むな。

なぜかパンダは俺の部屋にいついた。
というより処分方法がわからない。

保健所：パンダだぞオイ。

警察：俺が疑われるだろ確実に。

動物園：パンダ引き取ってくれるのかよ？有料？
ペットシヨップ…却下。

あーでもない、こーでもないと頭を抱える。

ただのパンダでも問題なのに、このパンダは

「風呂入るぞー」

勝手に風呂まで沸かし始めた。ないだろこの展開は。

俺は藁にもすがる思いで聞いてみた。

「おいパンダ、お前出て行く気は？」

「さらさらない。どうやって？」

「歩いて出てけ」

「谷山勇くん愛してるゝって叫びながら街中かけまわるか」
脅迫しやがった。

「捨てたら戻ってくる？」

「馬鹿じゃね？」

本気で馬鹿にされた。

なんでいるのか聞いても、パンダは
「気づいたら押入れにいた」

しか答えず、こうしてダラダラと同居生活が続いていく。

俺は昼間大学に行き、そしてその後にバイトだ。なんとか学費と家賃は親が仕送りしてくれるがそれ以外は自力で生き延びなければならない。

バイトはコンビニ店員をしている。

平日の夕方と土日の夜間だ。

なんとかこれで生き延びれそうだ。

あの生物さえいなければ、平和な学生ライフのはずなんだが…。

「おい、今日の廃棄なに？」

パンダがにじり寄る。

俺は疲れた体を後ずさりさせて、バイト先で貰った捨てる予定の余り物を差し出す。

ガサガサと嬉しそうに漁るパンダ。

「おい、新作のスイーツねーだろボケ」

「自分で買え馬鹿パンダ」

俺はヘタヘタと狭い部屋に座り込んだ。

パンダは俺には目も向けず、ムシヤムシヤと食べている。

「勇、俺の言った通りコンビニバイトって割かしいいだろ？」

そう。このバイトはパンダのススメだ。

気が乗らなかったが、廃棄が貰える〓食費が助かるの助言にてつい面接を受けたら受かったのだ。

なんでこんな知識あるんだパンダなのに？

そして冒頭のいつもの夕食シーンに戻るわけだ。

「あー腹いっぱいだーごちそうさーん」

ゲフーと満足そうにパンダが言う。

とりあえず正座してフォークで飯喰った姿にはある意味感心する。

「ねみい」

本能のままに生きる。それが野生の端くれの証拠。
俺がムツゴロウさんなら、優しく見守れるのに…。

なわけもなく、この無駄飯喰らいに

「皿くらい洗え」

と指示を出す。

「お前何言つてんだ？パンダに芸させるわけ？」

「居候してんだから、ちょっとは役に立て。毛皮にするぞコラ」

パンダが自らの顎を撫でつつ

「お前、俺の事馬鹿にしすぎ」

「は？」

「一応、世界で保護されてんだぜ？」

「どこの世界に言葉しゃべる図々しいパンダがいるんだよ!!」

パンダは露骨に嫌そうに皿を運び台所で洗い出した。

アテツケなのか、電気も付けずに暗い中でブツブツ言つて作業をする。

夜行性だなあと、生温かい目で見てみるとパンダが言いやがった。

「ラスカルじゃねーんだけど？」

森に帰って欲しい… 本当。

こうして、なぜかパンダとの生活が流れていく。

俺の願いは、はやく出て行つて下さいだった。

「おいトイレの紙はちゃんと補充しろよ」

俺がパンダに注意する。

「面倒くさい」

こつちを見もせずに拒絶。

本当にやりたい放題の馬鹿パンダだ。

一緒に暮らし始めて一ヶ月。

解決策はないままに、パンダは当たり前のように居座ってる。

俺が帰宅するなり

「貴方！！ごはんにする？それとも私？」

なんてフザけやがるから

「飯」

と答えたら

「とつとと作れよ」

と返された。何がしたいんだパンダのクセに。

友人から借りてきたwiiを勝手に繋いで

「ちょーおもしろいんですけどー」

とゲラゲラ笑ってプレイしている時は頭痛で座り込んだ。

「俺ほら、この手じゃん？wiiなら出来るわけよ」

と大変満足された様子で…。

その熊の手で俺の頭をモフモフしつつ

「ほれ、お前もしろよ」

と誘われた。

なんか意地になって対戦したら負けてしまった。

ドカンドカンと跳ねるので注意したけど

勿論聞くわけもなく、次の日に隣の人に

「若いから理解できるけど静かにね」

なんて怒られてしまった。

1階で助かった。というか、そういう問題ではない気がする。

怒られた事をパンダに告げると

「そりやお前、彼女かなんか連れ込んだと思われ…」

少し間を置いたあと

「なわけねーよな。ゲラゲラ」

ここまで馬鹿にされる俺ってなんなの？

「静かにしろよ。マジで保健所通報するぞ」

俺が脅すと

「新聞に男前に載るのか…俺とお前」

いや、俺は嫌だ。勘弁してくれ。

サインの練習しなきゃと、意味不明にウキウキするパンダを無理やり正座させて、コンコンと説教した。

「飯抜きにするぞ!!」

が効いたらしい。

少しうなだれて静かになった。

俺は安心してバイトに行つて、そして帰宅すると

部屋の電気もついておらず

もしかして出て行った?と思つたら

人のパソコンをネットに繋いでいじつてやがった。

モニターに向かうパンダの背後に立つて画面を覗く。

某掲示板に書き込んでいたのにも驚いたが

内容が…。

パンダ > 飼い主がイジめます <

のタイトルだった。

「こら何してんだよ!!」

俺が怒鳴る。

「んあ?今返事すんのに忙しいから」

と生返事だ

パンダ > もう家出したいです <

名無しさん > かわいそう!!ヒドイね!! <

名無しさん > うちにおいでよ <

パンダ > 女の子がいい25歳までのショートのカップ以上 <

名無しさん > パンダいやらしいぞ発情期か? <

パンダ > 繁殖させろよ <

「ちよつとまで」

さすがに止めた。

器用に爪でキーボード打ってるんじゃない。

というか掲示板するな。

抵抗するパンダの意志を無視して回線を抜いた。

「楽しかったのに勇の馬鹿」

とつとと押入れに押し込んで、俺はなかった事にして寝た。

そして起きるとやはりパンダがそこにいた。

なぜか台所でガチャガチャしている。

俺は眠い目をこすって眺めていたら皿を運んできた。

「おらよ感謝しろよ」

そう言っ出て出されたのは、目玉焼きだった。

どうやら謝罪のつもりらしい。

「やろうと思えば出来るじゃないか」

俺が言っ、パンダは不貞腐れた様子で

「うっせ。俺はできるけどしない子なんだよ」

とソッポ向いた。

皿は一枚で目玉焼きは俺の分しかないのに気づいた。

「お前は？」

「ああ…俺のはないんだ。玉子1個だけだったし」

俺はソッポ向いたままのパンダを見る。

「ほれ半分わけてやる」

俺が目玉を半分にわけて皿を差し出した。

けれどもパンダは

「俺はいいよ」

そして自分の皿を背後から出し

「もつといいの喰うから」

と、俺のとおっておきのハムをペロリと平らげた。

心を許しそうになった俺は自分を責め

そして天井を見上げて、とつとと出で行けとつぶやくのだ。

（後書き）

ただなんとなく思い浮かんだ話です。

読んでくださり、有難うございました。

いつもダーク系ばかりなので、こういうのもいいですね。
書くだけなら（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4887z/>

押入れパンダ

2011年12月16日17時50分発行